

## 『伊賀越道中双六』

天明三年（一七八三）四月二十七日から、大坂道頓堀の竹本座で初演された。近松門左衛門を浄瑠璃作者の第一世代とすると、第三世代にあたる近松半二の絶筆になる。「沼津」の平作の落ち入りの件の作曲を聞きながら半二が息を引き取るといふ、岡本綺堂の戯曲「近松半二の死」も書かれている。

伊賀上野鍵屋の辻の敵討ちは、寛永十一年（一六三四）十一月七日に、旧岡山藩士の渡辺数馬が、姉婿荒木又右衛門の助太刀を得て、弟の敵河合又五郎を討ち取ったもの。実録や講釈、歌舞伎「伊賀越乗掛合羽」など、多くの創作に影響を与えた作品系統の代表作が本作といえる。史実の背景にある大名と旗本の対立なども取り入れながら、主人公唐木政右衛門を軸とする全十段。沢井又五郎方に出入りの呉服屋十兵衛を中心とする、「沼津」は六段目、「伏見北国屋」は九段目にあたる。

沼津の立場で平作老人と知り合った呉服屋十兵衛は、爪を剥がした平作を助けた礼として、美しい娘お米に招かれ、平作の住家に赴く。身の上話から、かつて生き別れた平作の息子が自分に他ならないことを知る。思いを抱えて寝入った夜、お米が十兵衛の印籠を盗もうとして発覚、身の上語りから和田志津馬の妻であることがわかる。血を分けた親子兄弟であるだけでなく、敵討ちの敵味方であることを知った十兵衛は、印籠を残して去るが、十兵衛の身の上を知った平作が追いつがる。沢井又五郎の行方を聞き出すために平作は切腹、十兵衛は股五郎の目指す先を断末魔の平作（と立ち聞きするお米）に教える。

「沼津」の語り出し、「東路に、ここも名高き沼津の里」という、「名高き」の「き」の産み字（語尾の母音を伸ばすこと）は、東海道五十三次になぞらえて五十三の節数に変化するのだと言われる。描かれる所を転々とする「道中双六」の趣向の作品中でも、とりわけて旅する道中であることを重視する場面を象徴しているともいえようか。「蜘蛛の習ひと知られたり」で浅葱幕を落とすと、老いた人足が板付き。

荷持の安兵衛が走り書きを持って引き返す、老人足が声を掛ける、このあたりの足取りの変化の妙も面白いが、老人は、荷物をふうふう言いながら担いだ末に、木の根につまづいて生爪を剥がす大怪我を負う。しかし「用意の薬」で即座に治る。この靈験あらたかなまでによく効く薬が、のちの大事な伏線で、この薬は、三段目で沢井股五郎が「此印籠を預けるが、股五郎が一命を頼む」証拠と渡したものだ、この時点では必ずしもそうと分かるようには描かれていない。よろよろ立ち上がった老人は、「平作は千鳥足」と名前が分かる。しかし、荷持ちの安兵衛ともども、この六段目で初めて登場した人物で、何者とも分からない。そこへ来かかる娘は、「お米ぢやないか」とすぐに名前が知れるが、これが初段に登場した和田志津馬の恋人である吉原の瀬川太夫とは、まだここでは分からない。何より、主人公らしき旅人の名前が出て来ない。「沼津」の端場（「小揚」と呼びます）は固有名詞なしで進む

物語、旅の空ならば誰の身にも起こりうる行きずりの縁、と思わせて話が進むのである。

お米は、江戸の吉原の最高位の太夫だったので、ホスピタリティのプロの極み。なぜこんな里に？と思わせる美貌も隠しようがない。「目の鞆抜けし商人」が汚い平作の家に腰を落ち着けるのも、そのためであろう。追いついた安兵衛が荷物を持って、次の吉原宿に発つと、原作では古道具屋が乗り込んできて諸道具を持っていこうとするので、「是は難儀な所に泊り合はした」と借金を払ってやる件があり、「この娘御より他にもう子供衆はないかいの」と尋ねることになる。現行はこの件を省いて、いきなり尋ねて、自分こそが平作の生き別れた息子であると知る。「一々胸に応ゆる十兵衛」、ここで初めて、この段の主人公が、三段目に出てきた呉服屋の十兵衛であることが示される。

父と妹の貧苦を助けるため、金をやるための方便としての求婚。「こな様に、惚れたわいの」でしなだれかかる形は、初代栄三のそれが色気を湛えて、「何ともしなやかでええ格好」だったと初代玉男が回想している。しかし、お米には志津馬がいるので、十兵衛の計略は失敗、三者三様の思いを抱えたまま、床につくことになる。

「お米は一人物思ひ」から切場。初演時は、ここから竹本染太夫の語り場で、それまでの軽妙さから深刻味を増してゆく。しんと寂しい秋の夜の気分が横溢する中で、娘の盗み、その発覚、そしてクドキ。派手な節を抑えた寂しい気味合いの中でも、「我が身の瀬川に身を投げて」と昔の名前が出てくるころなどには、美しい合の手が添えられている。

行きずりの縁は、思わぬ親子の縁を導き、しかもその親子は敵討ちの敵同士ということまで分かってしまった。十兵衛はその恐ろしい運命から逃れるように、慌ただしく旅立つ（お米に言い残す台詞が、原作から増補されています）。しかし、残していった印籠と書き付けは、自身の出生と立場すべてを明かすもの。道具返し三重に追われるように、十兵衛、平作、お米、志津馬の家来池添孫八が、千本松原に引き寄せられることになる。

雨（雨音は上方風のカンカラ太鼓）をよける笠、その下に頬被りという十兵衛の拵え（「親の心を察しやり」の前に頬被りを取る）。「ヲ、イ」と遠くから声を掛けるようにして追いつく平作の懇願。情理をかみ分けるようにして、それを退ける十兵衛。詞の強弱、緩急が、揺れる心を表す。親であり、子であることを言わずに通す二人。しかし、平作は自害して、「こなたの手にかゝつて死ぬるのぢや」と訴える（胡弓の哀切な音色が加わる）。十兵衛はそれに応えて、ついに義理の枠を踏み越える。「股五郎が落ち付く先は九州相良」とは三段目で聞いていたこと、今の熊本県人吉市にあたる。

真の闇の中で探り合う親子は、断末魔の寸前に「親仁様」「兄」「顔が見たいわい」と、名乗り合えない建前を越えて抱き合う（このあたりの詞は、演者によっていろいろ増補の入れ事がある）。十兵衛の「今が親仁様のご臨終」という詞は妹お米に向けられたものだが、それにいち早く応えたのは池添孫八で、小石を拾うと刀に当てて火花を散らす。その刹那の火影で、十兵衛、

お米は平作の最期を見届けることができる。漆黒の闇の中で一瞬だけ顔を見合った親子兄妹は、広い世界を旅する内のほんの一瞬に出会い、「不思議に初めて逢ふた人」と忘れがたい時間をわずかながら共にして、再び別れてゆくことになる。

「伏見北国屋」は、歌舞伎での先行作「伊賀越乗掛合羽」に依拠した場面。昭和二十八年五月四ツ橋文楽座で野澤松之輔の補綴によって復活され、昭和四十二年三月国立小劇場での上演時に、さらに原作から補われている。京と大坂を結ぶ三十石船の起点で、眼病をわずらう和田志津馬と、それをいたわる瀬川（お米）、按摩に化けた池添孫八が敵の行方を探っている。偽の飛脚、偽の眼病、偽の医者と、敵を探る手立ての末に、股五郎が当所にいることを突き止めるが、それを討とうとするのを妨げるのが呉服屋十兵衛。十兵衛は討たれることで股五郎への義理を果たし、伊賀越えに鳥羽へ出て、九州へ落ちようとする股五郎のルートを志津馬に教える。唐木政右衛門の登場は「仮名手本忠臣蔵」の由良之助のようで、意外にも苦船から現れるのは「天河屋」、「志津馬が手に掛かりしはさぞ本望ならん」と十兵衛の心底を言い当てるのは「山科閑居」に拠るものか。

「伊賀上野敵討」は、人形の立ち回りの見せ場で、めでたく本懐。政右衛門（又右衛門）が、鉢巻に手裏剣を何本も挿した姿が、武者絵や歌舞伎では伊賀上野での図像的なトレードマークになっている。

（児玉竜一）